

日本近現代史入門 黒い人脈と金脈

広瀬隆・著

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み

数多くの日本人が、平和を「守れ！」と叫んでいる。これは、日本人が築いた『今の日本』は平和であることを意味する。そこで本書のテーマを「日本人はこうして平和な国を築いた」とした。

しかし「平和な国を築いた」というからには、日本はその前が平和でなく、戦争国家であり、アジアを大侵略した軍事国家だったというところから、話をはじめないとおかしいことになる。

その侵略時代の話が、現在の日本国の平和憲法が誕生する前にあつた「前篇」である。まず、それが分らないと、戦後から現在まで続く『平和の意味』というものが、皆目分らないことになる。

実は、この日本の侵略史は、随分昔にはじまった話なのである。そこで本書の前半に、「明治維新によつて日本に財閥が形成されて軍国主義を育てた！」というほとんど知られていない史実の経過を語り、特にその第三章から物語のクライマックス「激動の日本のアジア侵略史」をくわしく語りたい。

そして後半の第六章から、もうひとつのクライマックスである「敗戦後に日本国憲法を生み出し、見事に軍国主義を乗り越えた」という史実まで、近現代史のすべてを語ることにする。これほど大事な話を、賢い知識人たちが言わないからといって、黙っていていいわけがない。今の世情であれば多くの人が聞いてくれると確信して、私は、この物語をはじめめる。

目次

第二章

日本の財閥はどのように誕生したか……………13

財政能力を持たなかった明治政府……………	14
新政府はどのように財源を捻出したか……………	19
大坂の豪商をつぶしたかった明治政府……………	22
三井財閥はどのように誕生したか……………	26
明治政府が編み出したすさまじい閥閥……………	29
渋沢栄一が幕臣の仲間を政府に引き入れた……………	37
沼津兵学校を出た俊才たちが明治の改革をおこなった……………	40
長州藩の井上馨・山縣有朋の強欲を取りこんだ三井財閥……………	44
廃藩置県の陰謀で大阪の大手両替商が破綻させられた……………	50
三菱財閥はどのように誕生したか……………	56
日本郵船によって三井と三菱が合体した……………	62
住友財閥はどのように誕生したか……………	66

安田財閥はどのように誕生したか……………	69
全財閥が一つの閥閥となった……………	71

第二章

明治・大正時代の産業の勃興……………	81
--------------------	----

綿紡績によつて大阪が再起し、財閥の工業化がはじまる……………	82
政党政治家と財閥の力関係……………	87
徴兵制と共に、大名資産が華族銀行を生み出した……………	91
特権階級と軍閥が誕生し、大日本帝国憲法（明治憲法）が施行された……………	93

第三章

朝鮮侵略・満州侵略の歴史……………	101
-------------------	-----

戦争と日本人……………	102
植民地と侵略を定義しておく……………	106
植民地主義拡大の起源——台湾征伐と征韓論と松下村塾……………	108
朝鮮の植民地化に着手し、日清戦争を起こして閔妃を暗殺……………	120
朝鮮国内に京釜鉄道の建設はじまる……………	126

日露戦争による朝鮮の侵略——尖閣諸島と竹島の領有問題の起源……………	129
朝鮮行政と土地収奪の黒幕・東洋拓殖——韓国併合により植民地化を完成……………	138
砂糖産業のためにおこなわれた台湾の植民地化……………	150

満鉄を設立して大々的なアジア侵略に踏み出す……………157

軍需産業のために発展した日本の鉄道……………	158
鉄路を開拓した大産業と日本鉄道会社の創設……………	164
アジア侵略の動力「満鉄」は日露戦争と共にどのように設立されたか……………	168
日露戦争勝利と満鉄株売出しの熱狂……………	177
私鉄国有化の利権者たちが私鉄の売却資金を満鉄に注いだ……………	182
第一次世界大戦で化学工業が勃興——対華二十箇条要求……………	185
米騒動が示した都市住民の困窮——治安維持法の誕生……………	188
軍事費膨張と全国の労働争議……………	195
関東大震災の衝撃……………	203
植民地特殊銀行の設立……………	208
昭和二年恐慌が国民の財産を吹き飛ばした……………	217
恐慌で拡大した五大銀行の勢力……………	221

第五章

最終絶滅戦争に至った経過

ドル買い事件―大不況とテロ暗殺事件の続発……………	224
軍部とファシズムの勢力拡大―ついに満州事変が起こされた……………	227
満州国建国にとり憑かれた関東軍の暴走―国防婦人会の設立……………	233
平頂山の大虐殺から中国全土の侵略へ―軍人にすり寄った財閥……………	240
新時代の軍需産業のスタート―二二六事件……………	253

満鉄調査部が生み出した全体主義国家……………	258
盧溝橋事件（日中戦争）から南京大虐殺―国家総動員体制へ直進……………	265
産業報国会と大政翼賛会の謀略……………	272
企画院の人脈……………	278
通信社と新聞社を飼い馴らした情報局……………	280
満蒙開拓団を誰が送りこんだか……………	285
日本興業銀行の巨大な軍需融資……………	289
中島飛行機と満州重工業開発の台頭……………	294
新興財閥を率いた総帥の横顔……………	297
歴史は何を語ろうとしているか……………	304

第六章

敗戦直後の日本の改革と日本国憲法……………349

日本の戦争被害の記録……………	309
空襲のパターンと特徴……………	316
日本のぶざまな敗北……………	324
この戦争は一体何であつたのか?……………	329
反旗を翻した人間たちがいた……………	334
日本に乗りこんできたポツダム宣言のアメリカ人……………	350
八月二五日からの出来事——戦後の闇市に流れた軍需産業の隠匿物資……………	362
新政府が軍人に大金をばらまく……………	367
占領軍マッカーサーの厚木飛行場への来訪と新内閣の顔ぶれ……………	373
おそろべき飢餓に襲われた国民……………	382
海外の日本人帰還に命を懸けた海員たち……………	386
雨後のタケノコ政党の誕生……………	399
七人の男、日本国憲法制定に立ち上がる……………	408
鉄鋼産業の復活を妨げた賠償工場指定の苦難……………	425
財閥解体・戦争犯罪者の公職追放・企業解体・財産税の鉄槌が下る……………	428

第七章

左翼が燃えた証券民主化運動……………438

農地解放の革命と農作業の機械化——集団就職列車の運行……………446

戦後の工業・経済復興は

どのようなおこなわれたか……………455

アメリカ・ヨーロッパの映画が輸入されはじめた……………456

東西冷戦と朝鮮戦争——特需で自動車産業が息を吹き返す……………460

資本家と労働者が激突した……………474

国民を打ち捨てた戦後一連の経済政策……………481

東京裁判の処刑と衝撃のドッジ・ラインでドル三六〇円——証券取引再開……………486

国鉄三大事件（下山事件・三鷹事件・松川事件）……………494

サンフランシスコ講和条約と日米安全保障条約の締結……………499

日ソ国交回復……………508

岸信介の安保騒動で北方領土を失う……………514

キューバ危機とベトナム戦争……………520

石炭から石油へ……………525

東京オリンピック——大公害時代の到来……………	530
石油化学製品と廃棄物の散乱時代……………	541
水俣病の悲劇……………	544
森永ヒ素ミルク中毒事件から現在の環境保護運動まで……………	549
それでも大阪万博は開かれた——東芝社長・石坂泰三の暴言とイタイイタイ病……………	553
新しい羅針盤……………	561
あとがき……………	566

第一章

日本の財閥はどのように誕生したか

一九四五年（昭和二〇年）八月一五日の無条件降伏まで、日本は帝国主義をかざす大日本帝国であつた。それがアジアの国々を侵略し、野蛮で悲惨な戦争を起こした。その最大の原因は、ほとんどの国民が、軍人と政治家にそそのかされて、強力な軍隊を持てば日本人は豊かになれるという「軍国主義」になだれこんだことであつた。だが、原因は軍国主義だけではなかつた。軍閥と手を組んだもう一つのもの——明治維新時代に生まれ、国民を金の力で支配した「財閥」という怪物があつたのだ。軍閥に、金を持つ財閥が一体となつて、その資金力が国民を殺戮戦争の地獄に導いたのだ。もちろん、財閥とは、大産業のことである。

では、どこから明治時代の「軍国主義」が生まれたのだろうか？

そして、どこから明治時代の「財閥」が生まれたのだろうか？

この発端の一里塚を知るため、幕末から明治維新にかけて日本に起こった事始めの大変化を、意外なところから解き明かしてゆこう。それは「明治政府にどれほど財政能力があつたか」を追及するというミステリーだ。財政能力とは、金を動かす知恵のことだ。そう言われても、ほとんどの現代人は、これほど面白い話を知らないはずである……

財政能力を持たなかつた明治政府

明治維新は、西暦で一八六八年——すなわち江戸時代の徳川幕府の末期、いわゆる幕末の出来

事であつた。その一〇年前、一八五八年に徳川幕府が欧米列強と安政五ヶ国条約を結んで、翌一八五九年から長崎だけでなく、横浜と箱館（函館）が、アメリカ・オランダ・イギリス・フランス・ロシアの五ヶ国との貿易のために開港されることになり、やがてこのすぐれた幕臣の手で、横浜が日本一の貿易港となつた。しかし、その横浜開港前から、日本は動乱の時代にあつたのである。

ちょうどその頃、日本の中央部では、一八五八年に越中・飛騨^{ひだ}の大地震が起こつて数千人が死亡し、東海道を襲つた暴風雨など、天変地異が相次いで、大きな被害を受けていた。さらに同じ一八五八年に、外国人が持ちこんだ疫病のコレラが長崎から発生して、九州各地に蔓延したあと、大坂・京都に広がって江戸に流行し、この新しい疫病大流行のため数万人の死者を出し、国民全体が恐怖に取りつかれて、外国人排斥を叫ぶようになった。横浜開港翌年の一八六〇年から米価が急騰しはじめ、翌一八六一年には「外国人を排斥せよ！」と叫ぶ攘夷^{じやうい}の志士が活発な活動を展開したため、諸藩の大名は戦争が起こるかも知れないと用心を重ね、米の備蓄につとめたので、米価の上昇をますます加速させ、諸国に餓死者が多数発生した。

これで幕府・諸藩とも、困窮に陥つたのだ。諸藩は外国勢力に対する国防のため、莫大な出費をしなければならなくなり、下級武士の俸禄を削り、あるいは首を切つて浪人に追いやることが、どこの土地にも見られた。このころから武士階級がすでに、財閥の芽となる商人階級の持つ金の前に、敗北しはじめた。

やがて時は移つて天下大乱、慶応四年一月三日（一八六八年）のことであつた。年が明けるなり京都郊外の鳥羽・伏見に、「幕府を倒せ！」と叫ぶ倒幕の戦塵が巻き起こつた。土より龍が現われ、風雲急を告げるという干支の予言通り、戊辰の年で、人これを戊辰戦争と呼んだ。

この戊辰戦争によつて徳川幕府が瓦解し、明治新政府が誕生すると、この時代に続々と、民衆を金で支配する「財閥」が形成されたのである！なぜ商人が支配力を握つたのだろうか。それは、明治新政府の幹部に、商業に通じた者が一人もいなかったからである。

明治政府が誕生した初期に、政府の要職についた著名な人物は、いずれも幕末に倒幕運動に関わつた下級武士集団から出た。薩摩藩（鹿児島）の西郷隆盛、大久保利通、黒田清隆、松方正義や、長州藩（山口県）の木戸孝允（桂小五郎）、伊藤博文、井上馨、さらに土佐藩（高知県）の後藤象二郎、板垣退助、佐賀藩（佐賀県）の大隈重信、江藤新平、佐野常民たちがいた。ほかの政府幹部としては、京都公家と、大名藩主は揃つていたが、ごく少数の人間を除けば、彼らはいずれも経済の実務には暗かつたのだ。

明治政府要人のなかで、これらの公家と大名を除けば、残りは全員が下級武士であつた。下級藩士の多くは「武士は食わねど高楊枝」の世界に生きてきたので、金銭の扱いを知らなかつた。その代表者が明治政府の要職についたのだから、大半が経済の実務を知らなかつたのも当然である。

長州藩を中心とした貧乏士族が積年の鬱憤を晴らすために決起し、その貧乏侍の弱みにつけい

った長崎のトマス・グラバーのような兵器商人が、幕府の持つ兵器よりも高性能のイギリス製の武器を彼らに与えた。そのために維新という武力クーデターが起こり、緒戦の鳥羽・伏見の戦いで、最新式の洋式銃をずらりと揃えたゲリラ兵の前に、西洋文明の兵法で鍛えた幕府正規軍が敗れた。続いて、肥前佐賀藩が、鳥羽・伏見の戦いから一ヶ月後に旗幟きしを鮮明にして朝廷方に寝返って、幕府の海軍力をそっくりいただいたために、下級武士階級が勝ってしまうという奇想天外、驚くべき結果となった。貧乏侍たちが、幕府を倒してしまい、好きなように明治政府の要職を手にしたのである。この瞬間、彼らは自ら財政を動かさなければならぬ立場に置かれた。しかし商人のように算盤勘定そろばんのできないこの集団が、全国三〇〇藩にまたがる日本全土の大金を動かすことなど、到底できるはずがなかった。

明治政府を支配したのが薩摩と長州の藩閥政治といっても、薩長のクーデター主導者の下級武士は、藩主に対する深い恩義はなかったから、彼らはたちまち時勢を読み取って、「金の力があれば強い武器を得られる」という考えに走り、のちに「軍国主義」と呼ばれる思想にとりつかれた。それが戊辰戦争の勝利で実証され、明治維新によって獲得した強力な哲学であった。

この新政府が発足したのは、鳥羽・伏見の戦いが起こる一ヶ月前の慶応三年十二月九日であった。その時に、形式的な「総裁」に皇族を飾り、実質的な指令権を持つ「議定ぎじよう」と、その参謀閣僚となる「参与」の三職制度で政治をおこなうことを決し、一二月二三日に、金庫番として「金銭と穀物の管理組織」を意味する金穀出納所きんこくすいとうじよなる部署を京都御所の朝廷内に設置して、まず「戦

争資金」を調達することにした。ところが尊皇攘夷派で固められたこの官軍政府の中にあつて、元福井藩主の松平春嶽しゅんかくは、將軍家を守る佐幕側の代表者でありながら、実権者である議定の要職を与えられた。

春嶽とは、福井藩主・松平慶永よしながの号であつた。以前の彼は外国人排斥論者だったが、通商開国論に考えを変えて福井藩政の改革に成果をあげたあと、井伊直弼なおすけによる安政の大獄で、五年間も江戸の靈岸島れいがんじまに幽閉され、その時に春嶽と号したのである。外国の制度をくわしく調べて二院制の議会政治を理想とし、のち徳川幕府の政治総裁職として中枢に立つと、徳川一族でありながら、幕府の悪習を取り除くため徳川譜代大名だけでなく諸藩の意見を聞くべきであるとして、制度の大改革も進めてきた人物であつた。明治政府より、はるかに進歩的な平等主義の思想家であり、明治の元号も春嶽が決めたものであつた。

議定の要職に就いた彼が、明治新政府の顔を眺め渡すと、財務を知る要職にあつた者が政府に一人もいないのを見て驚いた。そこで、新政府の発足直後に、福井藩の家臣きみまさだつた由利公正を参与に任命し、金庫番である会計事務掛かかりとし、「資金」と「米」を調達する金穀取締にも任命して、財務一切の計画実行を命じた。一方、開国に反対した京都公家と政府要人の経済無知は、はなはだしいものがあり、大名の賢侯といえども財務については家老頼りの人間ばかりであつた。

そのため、彼らに代つて日本経済を動かしはじめたのが、商人財閥だつたのである。

三井財閥・三菱財閥・住友財閥・安田財閥・古河財閥・渋沢財閥・大倉財閥・浅野財閥・川崎

財閥・藤田財閥（日立・日産コンツェルン）が続々と誕生し、やがて野村財閥のほか、新興財閥と呼ばれる大集団が登場して、日本を大戦争に引きずりこんでゆくことになったのである。

新政府はどのように財源を捻出したか

明治と改元されたのは、戊辰戦争渦中の慶応四年九月八日（一八六八年）だったが、この慶応四年の初め、一月三日に鳥羽・伏見の戦いで幕府側の敗北が決したので、以下は慶応四年を明治元年として記す。また明治五年一二月三日を明治六年一月一日として、この日から日本が西暦を採用したので、明治時代の出来事は、時代の流れが分るように主に和暦の日付を優先して記述する。

政府首脳の座に就いた者には、政治方針がなく、行政能力がまったくなかった。彼らに分っていたのは、恨みを持つ福島県の会津藩と、山形県の庄内藩を討つため、東北征伐の軍資金をつくることが急務であった。しかし彼らは、当時の行政の第一である小判の作り方も一分銀の作り方さえも知らなかった。そこで、豪商の三井を呼びつけて、金穀出納所御用達を申しつけた。仕方なく三井は、京都御所に手代を一〇人も派遣して、由利公正のもとで「資金」と「米」を調達する実務をとりおこなった。この金庫番が、のちに大蔵省となったのである。

まだ生き残っていた徳川幕府も、有能な勘定奉行がいなければ財政は動かせないというのに、

鳥羽・伏見の戦いに敗れた直後、明治元年一月一五日に、將軍・徳川慶喜よしのぶが、幕府随一の有能な勘定奉行・小栗上野介おぐりこうぜいのすけを突然、罷免したのである。ところがその同じ日、新政府が、大手両替

商の三井三郎助、小野善助、島田八郎左衛門の三家に対して金穀出納所に出頭するように命じ、ここに新政府の財政が始動した。そこで商人の三井、小野、島田の三家が資金調達を命ぜられ、いたしかたなく一万両を献納させられたが、続いて三〇〇万両、五万両、一五万両と、幕府にも劣らぬ法外な金を次から次へとせびられる泥沼となった。ほどなく一月二九日、新政府はさらに関西地方の巨商と富農一三〇人を京都の二条城に集めて資金の供出を求め、続いて二月一三日には一五人の豪商に会計御用掛を命じた。由利公正は、農地の税金（地租）を抵当にした借金によって、京都・大坂・大津の富豪から三二四万両、また江戸・横浜の富豪から一八五万両のほか、合わせて五六四万両の大金をかき集めて、新政府の戦闘用の財源とした。

かくして新政府は、五箇条の御誓文を発表した二日後、明治元年三月一六日になると、両替商に金を出させるより、自分で貨幣をちゆうぎ鑄造しなければならぬことによりやく気づいて、江戸幕府の金座・銀座の貨幣鑄造を停止させ、その鑄造機械を京都に送るよう命じた。四月一日に江戸城が開城され、最後の將軍・徳川慶喜が水戸に向かつて江戸を去り、二六〇年続いた徳川幕府が瓦解した。それから一週間後の四月一八日に金座・銀座を接收した新政府は、自分の手では金貨と銀貨を製造できなかつたので、幕府時代に住友家が献納した鑄造機械を大坂に置いて、五月二八日に金貨の鑄造にくわしいという片山権平こんぺいなる者を初代の造幣所長に任命し、金貨と銀貨の

鑄造を開始した。由利公正が派遣したこの片山権平が、実は幫間ほうかんだったのである。幫間とは吉原遊廓で客の宴席に侍して遊興を助ける男芸者の太鼓持ちである。こんな男に鑄造をさせたのだから、その粗悪な貨幣に、外国商人からも不満が続出し、見るも無残な明治政府発足となった。

新政府の人間でよく動いたのは、口先と、剣先と、銃の筒先だけであつた。由利公正が発行した太政官札たじようかんさつという最初の政府発行紙幣は、一一八八万両も発行されたが、ほとんどは新政府の国庫補填と巨額の戊辰戦争軍資金のために使われ、金銀と交換できない紙幣なので信用度が低く、流通困難となつて一〇〇両が六六両に暴落した。やることなすこと行き当たりばつたりで、やがて、幕府時代に活躍した能吏のうりを探し出しては抜擢し、要職を与えて面倒な諸事にあたらせなければならなかつた。

「一君万民」を謳つて、幼い天皇を頂上に据えて神に祭り上げ、ほかの国民はすべて平等と宣言しておきながら、新政府は華族階級をつくり、やがては彼らに五段階の公爵・侯爵・伯爵・子爵・男爵の爵位を与えた。かくして、政治権力を持った貴族院議員と……金を握った財閥と多額納税者……絶大な行政権力を握る官僚機構……武力を握る軍人と警察が、次々と市民・農民・漁民の生活をしばりあげる、このような新しいブルジョワ封建社会が誕生したのである。そもそも、ブルジョワ封建社会などという言葉そのものが、矛盾する二つの組み合わせであつた。しかしこの成り行きは、決してウサギの腹からマムシの子供が産み落とされた現象というわけではなかつた。

もし明治政府が嘘偽りのない民主政府であり、自由平等に向かって政策を進めていけば、一九四五年の日本敗戦・無条件降伏後に大改革が必要になるはずはなかった。維新後の五年、一〇年の混乱期というなら釈明の余地もあるうが、八〇年近くもそれをしなかったのだから、明治時代が民主主義とはほど遠いものであったことは、言うまでもない。

大坂の豪商をつぶしたかった明治政府

戦乱の中から明治新政府が誕生した時代に、「農民、職人、商人たちが、人口の大半を占めていた」のが日本であつた。つまり明治維新の戊辰戦争は、国民の中のほんのひと握りにすぎない下級武士たちの物語にすぎなかつたのである。では士農工商の階級社会のうち、武士を除いて、肝心の農・工・商はどうだったのか。その大衆が、幕府・朝廷・藩主に対してどのような感情を抱いていたか、日本史ではほとんど記録らしい記録が紹介されていないので、まずここから説明する。

江戸時代に「百姓とゴマの油は絞れば絞るほど出るものなり」と、武士や大地主が小作人を酷使したしきたりは、明治政府の施策によって改善されるところか、一層ひどくなつた。食糧を生み出す農民に対する思いやりをまったく持たなかつた新政府は、幕府時代より苛酷な税の取り立てをはじめたのである。

当初は徳川幕府の崩壊後、自由が与えられるかと内心で期待をかけた民衆も、たちまち明治政府の無能さと横暴さに気づいた。五箇条の御誓文の冒頭にある「万機公論に決すべきこと」とは立派な文句だったが、明治政府が公論に決したことなど、一度もなかった。そこで農民も職人も商人たちも、内心ですっかり政府を馬鹿にしはじめた。この政府が本物ではないと知ると、自分の身は自分で守らなければならない時代が来たことを自覚したのである。昔の藩主を懐かしんで反政府の狼煙^{のろし}をあげる者もあれば、世直しを唱えて、身分制度の撤廃に立ち上がる者もいた。

これ以上失うものがない貧しい者ほど、その熱気が強く、とりわけ百姓たちには結束力があり、明治二年、三年、四年には、百姓一揆が続発した。さらに穢多非人^{えた}と差別された最下層民の要求は、きわめて直接的だった。農民の義気というものは、いつでも戦略を持たない無謀な反政府行動に走るものであるから、百姓一揆が続発したのだ。明治政府の中核は、下級武士であるから、こうした民衆の反乱に対して、徹底的にこれを弾圧して、無慈悲な処罰と処刑をもつて報いた。まさに、当時の才筆家・福地源一郎が言ったように、「ええじゃないか、とか、明治維新というが、ただ政権が幕府から薩長に変っただけだ。薩長を中心とした幕府が生まれただけ」だったのである。

大工や陶芸家などの町方の職人たちは、かつては藩主と幕府から庇護されて職を得てきたが、明治四年に廃藩置県がおこなわれると、庇護してくれる藩主が消えたので、新政府の無策の前に多くの職人が仕事を失った。農民と違って田畑を持たない彼ら職人は、家族に飯を食わせて生き

る道を探らなければならず、各地で苦しい流転の時代が続いた。

その時、経済の動脈を握る賢い商人たち——これが財閥の卵だったが——彼らは、どのように行動したのか。後年の歴史では、○×商店が勤皇側にどれほど資金援助をしたかという事績が「美談」として書き記されているが、数少ない人物を除けば、ほとんどは新政府に媚びるため後年に脚色された話である。総じて商人は、お上から注文を受けて店を^{たな}守らなければならなかった。ので、資産家は財産を狙われる立場から、「力の強い側」につく鉄則を守り、佐幕と勤皇のいずれが勝つかという推移をじっと見守り、自分の感情を表に出す愚か者はほとんどいなかった。幕末には、豪商であれば佐幕と勤皇の両方から巨額の軍資金を請求され、乱暴な刀剣の脅しを受けて、両方に金を出していたし、そうでなくとも市中にはあぶれ者が徘徊して両替商を狙うゆすりが行き、両替商が店をたたんで逃げ回る時代だったのである。維新後しばらくは、かつて仕えた藩主・家老・奉行たちがどうするかを真似て、表向きは愛想を絶やさないようにしたが、得体の知れない新政府を信用する商人などほとんどいなかった。

日本では、明治時代に生き残った財閥のうち、江戸時代からの老舗だったのは、呉服商と両替商で成功した「三井家」と、貨幣の製造を支配してきた「住友家」だけであった。しかし彼らよりむしろ、大坂を代表する^{このいけ}鴻池善右衛門、天王寺屋五兵衛、平野屋五兵衛らの十人両替・富商集団のほうが資本を蓄え、大名と幕府に対する大きな影響力を持つ集団であった。なぜ、明治半世紀のあいだに、これら大商人の一団が消え去ったのか。

新政府側では、徳川幕府と親しく、日本最大の経済力を握っていた大坂の両替商を切り捨てようという腹があつた。というのは、徳川幕府の護衛隊である新撰組が大坂両替商・平野屋五兵衛から一〇〇両を借り、この金で有名な揃いの隊服をあつらえていた。鴻池善右衛門を中心とする大坂の豪商たちが、新撰組と会津藩に対して七万両という大金を出資した。鳥羽・伏見の戦いの三日後には、大坂八軒屋に待機する新撰組隊士に対して、大坂の平野屋五兵衛が炊き出しをおこなっていた。そこで新政府は、戊辰戦争のさなか、明治元年五月九日に、銀目停止ぎんめちようじを発令して、大坂両替商に大打撃を与えた。これは、ひょうりょうの秤量銀貨を廃止するという命令であつた。そのため日本一の大坂の両替商は、ここで藩への銀の貸付分が吹き飛び、銀が使えなくなつて商いの道を閉ざされた。

そこで新政府は、大坂両替商の代りに三井を味方につけたのだ。

かくして数ある大手両替商や豪商のなかで、明治時代の最後まで財閥として生き残つたのは三井と住友だけであつた。

商業のゆきつく頂点が長者であり、それが集団を成したときに「財閥」となつた。日本では、三井、三菱、住友、安田、古河、大倉、浅野、川崎、藤田（日立・日産）、渋沢の財閥が明治維新の中から次々と誕生した。なかんずく三井と三菱の資本力は、群を抜いていた。

三井財閥はどのように誕生したか

日本最大の三井財閥が誕生した由来を知るため、幕末に戻ってみる。三井は、複雑な立場に置かれていた。江戸の三井両替店は、最後の勘定奉行・小栗上野介から軍費として莫大な資金の上納を命じられ、破綻の危機に直面した。その時、かつて小栗家の知遇を得ていた小さな両替屋・美野川利八に三井の番頭が目をつけ、小栗との交渉にあたらせた。というのは一八六〇年に、目付時代の小栗上野介から「万延小判改鑄まんえん かいちゆう」によって、天保小判一両が万延小判三両余りと交換される」という幕府の重大な政策を聞き知って、天保小判を買い集めてぼろもうけした男が美野川であった。それほど小栗上野介に可愛がられた美野川なので、彼は小栗に「三井を殺さず、幕府は三井を利用すべきだ」と説得して、御用金を大幅に減額させることに成功し、それによって三井は生き返った。その後の小栗上野介は、横浜貿易の資金融資の実務を三井に担当させたので、三井は莫大な公金を扱う特権を獲得した。そこで三井家は、幕府と折衝した商才を認めて、美野川利八を雇い入れた。美野川は三井家の「三」をとって三野村利左衛門と改名し、金融担当を命じられた。この融資特権が、のちに三野村によって三井銀行の礎となる部門であった。

三井大元方で後見格に昇進し、三井の中心人物となった三野村利左衛門は、やがて幕府最高の知恵者・小栗上野介が將軍によって罷免されると、もはや徳川幕府に人材なし、将来なしと見限

った。一八六五年（慶応元年）から三井は、勤皇派との接触を開始し、薩摩藩のために通貨の引替御用を引き受けた。三井大坂両替店の番頭・吹田^{すいた}四郎兵衛が薩摩の大久保利通^{としみち}と手を結んでいたのである。三野村が佐幕、吹田が勤皇と、二股をかけたのだ。そこで三野村は、新政府が金を請求してきたなら、幕府を捨てて資金援助を開始するよう三井組に働きかけた。こうして、先に述べたように三井が官軍に巨額の融資をおこなうことを決断し、動乱を乗り切ることに成功したのであった。

ここから動きだしたのが、新政府を支配する三井の戦略であった。口から大言壮語を吐くばかりで、間の抜けた新政府に財務を知る者がいないことを見抜いた三野村には、赤子の手をひねるようなものであった。たつぷり金を貢^{みつ}いでおけば、新政府の金庫をそっくりいただけることが見えていた。このあと三井は新政府の財務を総なめにしていったのである。まず吹田四郎兵衛が、三井を出て新政府に潜りこんだ。明治二年二月二二日、内外商業の振興を目的に新政府が「通^{つう}商^{しょう}司^し」という貿易部門を設立し、最大の利益をあげる生糸（絹糸）貿易の窓口である横浜で、外国貿易の事務を管掌することになった。この設立を建白したのが三井の番頭・吹田四郎兵衛で、自ら通商司の長官である権正^{ごんのかみ}の座を占めた。

さらに翌明治三年、吹田は金庫を預かる大蔵卿（大蔵大臣）の佐賀藩・大隈重信^{おおくましのぶ}に、官営の汽船会社を設置するよう建白して、船舶輸送会社を設立させた。そして吹田の支配下に、通商会社と、金融業務を営む会社を設立した。これらは東京・大阪・京都・横浜・神戸・大津・新潟・敦

賀の全国主要八都市に、政府が各一社ずつ設立した。要約すると、国が船会社、廻船問屋、貿易会社、銀行を経営して、その国というのが、そっくり三井の番頭によって動かされるという巧みな仕組みであつた。

このうち最も重要な金融部門の役員を見ると、鴻池善右衛門以下ずらりと、幕府が設立した商社の幹部がそっくりそのまま居並び、そこに三井元之助・島田八郎左衛門・小野善助の官軍パトロンが加わった構成になっている。これで資金はほぼ無限に出てくるようになった。

あとは、最大の貿易港として栄える横浜の土地問題が残っていた。そもそも幕府が外国貿易のため寒村の横浜に市街地を建設したとき、幕臣たちは、農地を商人が私有することを認めず、借地として外国貿易を経営させてきた。ところが横浜商人がみるみる富を蓄え、豪商になってくると、借地では身動きがとれなくなってきたので、明治に入って土地の私有化が認められることになった。横浜は長崎を抜いて日本最大の貿易拠点となっていたから、その土地は巨大な宝の山であつた。明治五年三月から神奈川県知事・陸奥宗光^{むつひねみつ}が地券の発行をスタートし、農民への借用料のわずか五年分で土地を買い上げられるようにしたのだから、商人たちは競って土地の買い占めに走り、横浜大地主が続々と誕生した。

これと同時期に、先の船舶輸送会社を解散して、代りに三井、鴻池、小野組などに出資させて「日本国郵便蒸気船会社」^{にっぽんくわく}を設立させた。政府が所有する蒸気船を同社に払い下げ、民間の船会社が設立されたのである。明治五年八月のことである。この前年に廃藩置県を断行して藩をつぶ

したので、政府は全国三〇〇藩から莫大な財産である船を取り上げ、これを同社に与え、さらに運航助成金も支給して、半官半民の巨大海運会社を生み出した。これも事実上は、三井の三野村利左衛門の手の中で動く海運会社であつた。東京―大阪間に月四回の定期航路が開設され、横浜にも寄港するようになり、これが主力海運となつた。同社を使つて、郵便制度が明治政府の名のもとに実現した。さて何が起こつたのか。

このような政策を実行した切れ者の神奈川県知事・陸奥宗光は、戊辰戦争の年に、大坂の花街・難波新地の芸妓・蓮子に惚れて結婚したが、このような芸者との結婚では、外聞をはばかつて、妻の身分や格式を高めるために、一度どこかの養女に出してから結婚するのが慣わしだつた。妻・蓮子の養父となつた人物が、実は三井の番頭・吹田四郎兵衛だつたのである。

明治政府が編み出したすさまじい閨閥

商人経験のない下級武士が新政府の要職についたため、彼らは銃砲で民衆の怒りをおさえつてながら、幕末の外国奉行と勘定奉行が切り拓いた徳川幕府の外国貿易をそっくりいただくことにした。軍資金を求めて、港に栄える産業を自分たちで支配することを考えたのだが、まず産業資本家を味方に取りこむために、最も手つとり早いのは、結婚による縁結びであつた。彼らは巨大な閨閥を編みはじめた。

新政府首脳が直接、商人たちと血族関係を取り結んだのである。維新政府は、国民の自由を謳いながら、強欲にも自ら率先して、その自由の分け前の最大の獲物をぶんどり、懐に入れることに、これ努めたのである。

薩摩出身で初代大蔵大臣と総理大臣を歴任した松方正義がその典型であつた。生糸貿易のために横浜正金銀行しょうきんを設立し、日本銀行を創設したこの明治の元勲は、資産額で長者番付の鹿児島県第一位となつた。明治天皇に、「子供が何人いるのか」と尋ねられた松方正義は、自分でも子供数が分らず、「調べてから後日お伝えします」と答え、子だくさんだつたことが逸話として語られるが、総理大臣の子供の数が犬猫のように多く、少なくとも二十数人に達したことが問題だつたのではない。肝腎なのは、松方家の結婚相手に、次のように、その筋で名だたる一族が揃つていたことである。

日本の生糸貿易の先駆者で横浜生糸会社「会長」の新井領一郎

船成金三人男と呼ばれた山下汽船「創業者」の山下亀三郎

川崎造船所（川崎重工業）「創業者」の川崎正蔵

東京地下鉄道「社長」の野村龍太郎

大阪商法会議所「会頭」として関西財界に君臨した五代友厚ごだいともあつ

経営会社が十数社におよんだ関西実業界「重鎮」の松本重太郎

三菱財閥二代目「総帥」の岩崎弥之助（岩崎弥太郎の弟）

兵器商人から巨財を成した森村組「社長」の森村市左衛門

鉄道庁「長官」として鉄道界に君臨した井上勝

大日本印刷の前身となる秀英舎の「創業者」佐久間貞一

群馬県「第一位の長者」で日本屈指の織物豪商・堀越角次郎

三井の「大番頭」として鐘淵紡績を差配した中上川彦次郎……
なかみがわ

といった当時の豪商代表者をざっと一ダースも「血族の松方コレクション」に集めて陳列し、自ら大蔵大臣と総理大臣をつとめたのだから、これで財閥が生まれなければ不思議であった。右に示した一ダースの大物は、それぞれがまた、一ダースずつの大物で自分の家族内に閥閥を形成した。本書では、これから何点かの系図を描くが、その意味を説明しておく。当時の日本人は、現代人と違って、家父長制であったため、父親が息子や娘の結婚相手を決め、それに反抗する子供は勘当させられるという時代であった。したがって、系図が、ほぼ百パーセント、一族の利権の獲得と配分のメカニズムを露骨に描いていたのである。たとえば松方一族の最後にある三井の大番頭・中上川彦次郎は、鐘淵紡績だけでなく、日本郵船・三井鉱山・三井銀行・王子製紙まで支配したが、彼は福沢諭吉の甥であった。

この福沢諭吉と中上川一族に入る代表者を挙げると、

幕末の蘭学者として「筆頭」に挙げられる緒方洪庵

三井財閥「大番頭」から大蔵大臣・日銀総裁となった池田成彬しげあき

安田財閥「番頭」から大蔵大臣・日銀総裁となつた結城豊太郎^{ゆうき}

鐘淵紡績「社長」の日比谷平左衛門

鐘淵紡績「社長」の武藤山治^{さんじ}

三菱銀行「頭取」の加藤武男

大日本製糖「社長」の藤山雷太

日本鉄道会社を創設して「社長」に就任した小野義真^{ぎしん}

三井の四天王で王子製紙「会長」の朝吹英二^{あさふき}

日本興業銀行「総裁」の志立鉄次郎^{しだち}

電力王の大同電力「社長」福沢桃介（福沢諭吉の女婿^{むすめむこ}）

三菱長崎造船所「支配人」の莊田平五郎^{しょうだ}

そして系図1の松方閥にも、系図2の福沢閥にも、三菱財閥創始者・岩崎弥太郎がいるのだから、全員が三菱閥にすっぽりおさまつたのである。

四頁にわたって示した系図に登場する企業と役職は、みな当時の日本の最上位にあつた独占支配者だったのである。「門閥制度は親のかたき」と言つて主君の中津藩（大分県）に後足で泥をかけ、江戸幕府の制度を時代遅れとののしつたのは、当の福沢諭吉である。「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」と言い、近代社会では人間はみな平等であると説いた人間にして、自ら巨大な福沢門閥をつくりあげた。金を持っている者が社会を支配して何が悪いとばかりに、

資本主義をひたすらに邁進し、そこに生み出したこの強大な利権ファミリーは一体何であつたろう。さすがにわが国紙幣の最高額一万円札の肖像画の人物として眺める価値はある。

渋沢栄一が幕臣の仲間を政府に引き入れた

以上の事実から、明治政府の性格が明らかになる。明治政府要人には、残念ながら実務能力がなかった。だがその後、明治時代には実際に産業が隆盛したのだから、殖産興業を誰が主導したのか調べてみると、多くの実業家の伝記には、こうある。「東の渋沢栄一、西の五代友厚こだいともあつと呼ばれた」あるいは「東の渋沢栄一、西の藤田伝三郎と呼ばれた」、つまり西の大実業家が好んで引用する東の実業家は渋沢栄一だったのである。それほど膨大な事業に関わった渋沢栄一が、明治時代の産業を育てることになった。

渋沢栄一は、現在の埼玉県深谷市出身で、染料の藍商人あいの息子として、実際の商いに従事しながら商才をきたえるうち、外国人を排斥することの愚かさよしのぶに気づいて、将軍・徳川慶喜の家臣となった。そして弟の徳川昭武がパリ万博に参加したとき、一行の監督としてフランスに随行した異色の幕臣であつた。ヨーロッパでの見聞に大いに学びながら、パリ滞在中に幕府が崩壊したため、やむなく帰国の途につき、明治元年一二月に、落ち延びた徳川將軍家に帰参して静岡に入り、新たに設置された静岡藩の理財を担当することになった。ここで渋沢栄一は、株式組織の商事会

社を設立して、製茶と、生糸をつくるための養蚕ようさんを柱に、金融も営む事業に成功をおさめ、全国から注目を浴びるほどの成果をあげた。

その時、財務に迷走する明治政府が彼に目をつけ、明治二年一〇月、「新政府が渋沢栄一を登用する」との命が静岡藩に伝えられたが、渋沢は新政府を嫌って再三の要求を固辞した。しかし静岡藩主・徳川家が新政府に恭順を示そうと、渋沢に新政府に出仕するよう命じたので、藩主の命には逆らえなかった。一二月に渋沢が上京して租税正そぜいのかみの肩書で財務主任に就いたのである。政府に入った渋沢は早速、大蔵大輔たいふ（大蔵次官）の大隈重信に、大蔵省の改正を進言し、明治三年七月には渋沢が自ら設立を建言した大蔵省改正掛かかりの掛長に任命され、ようやく明治政府に本格的な財務行政が動きだしたのである。このとき渋沢は明治政府を変えるひとつの秘策を知っていた。かつての仲間である優秀な幕府の家臣（幕臣）を静岡藩から呼びこんだのである。前島密ひそか（日本郵便制度の父）、赤松則良のりよし（海軍工廠生みの親）、杉浦愛蔵（交通通信担当官の初代駅えき通正ていのかみ）たちが新政府の要職に抜擢されて活躍することになった。このうち杉浦愛蔵は、今は亡き勘定奉行・小栗上野介の従弟であり、パリ万博に同行して以来、渋沢の親友であった。こうして徳川時代のすぐれた幕臣たちは、幕末から明治時代にかけて、主に三つの生き方を選んだ。

第一は、勘定奉行・川路聖謨かわじとしあきらのように自ら死を選ぶか、小栗上野介のように殺されるか。

第二は、官軍に対する徹底抗戦を求め、上野彰義隊に加わって上野戦争に参じ、あるいは榎本

たけあき
武揚に従って北海道の箱館戦争に参じた。多くの者が殺されながらも、かなりは降伏して生き残った。

第三は、四〇〇万石の將軍の座から追われた徳川家に従って、江戸から駿河・遠江・三河（静岡県・愛知県）の三国に七〇万石をもって新設された駿河府中藩に赴いた。その数は、將軍直属の家臣である旗本五九二七家、御家人二万六〇〇〇家、総計三万二七九九人のうち、およそ一万五〇〇〇家が駿河に入ったというから、膨大な数であつた。箱館戦争で降伏した者の多くも、のちに赦免されて静岡藩に帰参した。だが途中で江戸などに戻った人間もいて、定着した人の実数は定かではない。徳川家の駿河府中藩が設立されたため、その領主だった大名は居城から追い出され、千葉県房総半島に新領地を与えられて移住した。駿河府中藩の「府中」は「不忠」に通じるとされ、政府に恭順を示すため、のち明治二年二月に静岡という名を創造して静岡藩と改称した。

そのため静岡には、かつて幕府の仕事をこなしていた俊才が、朝敵の汚名を着せられて、山のようにいたのである。そこに沼津兵学校と静岡学問所が設立され、同時代で屈指の高等教育が実施された。後世に秀才の宝庫として知られるようになった沼津兵学校は、兵学校といつても、後年の軍事大学が戦争だけを目的とした学校であるのと違って、医学や土木から工学までの広い学問を基にした専門学校であつた。江戸幕末時代の幕臣はそもそも、戦争のない時代の武士であり、知識層のエリートだったから、関ヶ原の合戦時代の「人斬り武士」ではなかつたのである。こう

して静岡が、皮肉にも明治政府に必要な実務者の宝庫となり、「天朝御雇」^{てんちようおやとい}と呼ばれて政府に招かれ、当初はいやいやながら民部省・大蔵省・工部省や陸海軍などに仕出して、たちまち頭角を現わし、あるいは民間企業の指導者となっていたのである。

沼津兵学校を出た俊才たちが明治の改革をおこなった

そうした官僚の代表者の一人が、日本の統計学の祖と呼ばれた杉亨二^{こうじ}であった。彼は長崎にある幕府の時計師・上野俊之丞^{しゆんのじよう}の店に働いていたが、俊之丞の息子・上野彦馬^{ひこま}が日本で最初に商業写真家となる著名な化学者であった。そのため杉は、そこで知り合った緒方洪庵^{こうあん}の大坂塾や長崎などに多くを学び、のちに幕府の蕃書調所^{ばんしよしらべしよ}の教員となった。ここは、江戸で最高の頭脳が結集した天文学者グループを母体として生まれた学校で、ペリー来航三年後の一八五六年に江戸九段坂下に設立された西洋学の教育研究機関であった。オランダの蘭学だけでなく、英語・フランス語・ドイツ語・ロシア語、さらに西欧の化学……機械……物産……数学……西洋印刷術などまで広範囲の教育がおこなわれた。これがさらに洋書調所……開成所と改称されて発展したが、のちに現在の東京大学となった。

幕府瓦解後の杉亨二は、この開成所を出ると徳川家に従って静岡藩へ移って、沼津兵学校の教員となり、明治三年に民部省の下級官僚として政府に出仕した。杉は、そこで三箇条の建白書を

提出して、

一、奴隸の廃止

二、四民互いに婚姻を許す

三、土下座の礼の廃止

を強く求めた。

第二項にある四民の婚姻を許せとは、士農工商の差別撤廃の要求であつた。明治政府は身分制度（部落制度）を続け、士農工商の差別さえ撤廃できない集団であつた。杉の建白書の結果、翌明治四年八月二三日に華族・士族・平民の相互の結婚を許可する太政官布告が出され、八月二八日には穢多非人の呼称を廃止し、身分・職業とも平民と同様とする太政官布告が出された。この部落解放令は、土佐藩の大江卓がこれを建白した偉人として名を残しているが、実際に明治政府最大の偉業である身分制度撤廃を実行させたのは、建白書の経過から明らかなように幕臣出の杉亨二であつた。杉は人口調査の必要性を説き、統計を扱う正院という部署の大主記に任ぜられると、ここで諸官庁に人口調査をおこなわせ、続いて輸出入貿易年表を改良し、明治七年には太政官に任命される。さらに明治一四年には杉の建言で統計院が設置され、わが国最初の「統計年鑑」が発行された。

もうひとつの明治政府の大改革は、明治六年七月二八日に大蔵省が実施した地租改正条例であつた。これは、幕府時代に土地を所有できなかった農民に土地の所有権を認める進歩的な政策で

あつた。しかも土地の測量を農民に任せて、すべての土地に地券を新設することによつて、地価の三％を地租として納税させる制度であつた。この偉業は後年、大蔵卿・大隈重信と租税頭・そぜいのかみ陸奥宗光が主導し、次の租税頭・松方正義が大久保利通総裁と共に実務一切を遂行したことになつてゐるが、これも、功労者の名を間違えている。実際に前年の明治五年から地租改正作業を進めてきたのは、明治政府に地租改正を建白した幕臣出の蘭学者・神田孝平たかひらであつた。神田は、杉亨二と同じく幕府の蕃書調所の教授であり、維新前年の慶応三年にイギリス人ウィリアム・エリスの経済学書を『経済小学』として訳し、ヨーロッパの経済制度を日本に初めて紹介した屈指の西洋経済学者であつた。維新後は、最も世評の高かつた『中外新聞』で活躍したが、これが明治政府の封建制を批判し続けて弾圧され、発行禁止に追いこまれたため、仕方なく明治政府に出仕し、文部大輔・江藤新平の部下として文部大丞だいじようとなり、地租改正に取り組んできたのである。だが神田の考えた公正な地租改正と違つて、政府要人が広大な土地から高額の年貢収入を得ようと目論んだため、制度の目的がひっくり返された。結果、土地所有者となつた農民が、金銭によつて税金を払う義務を課せられ、貧しい農民にはかえつて重い負担となつたのであつた。そして貧農が裕福な者に土地を売り渡して小作人になる者が続出し、寄生地主が強大な勢力となつてしまつたのである。

もう一人、日本の水力発電の父と呼ばれ、民間で活躍して名高い田辺朔郎さくろうも沼津兵学校を出た理工系の秀才であつた。近代文明の柱は、大きく分けて、江戸時代からの伝統を受け継ぐ機械・

工学系と、薬種と西洋医学伝来による医学系、この二本の流れにあったが、機械・工学系は、紡績……造船……金属……化学……天文……測量……数学などを含めて数々の創意、発明に広がっていた。その源流にあったのが、長崎の蘭学に端を発した知恵であった。田辺蓮舟^{れんしゅう}は、幼時より神童と呼ばれ、幕臣の洋式砲術家として名を成し、長崎海軍伝習所にも学んできたので、幕府瓦解後は沼津兵学校の教授として多くの生徒を生み出した。この蓮舟に育てられた甥の田辺朔郎は、沼津兵学校からその知恵を受け継いで、一八八五年にわずか二三歳にして滋賀県琵琶湖の水を滋賀県大津から京都に導く疏水^{そすい}工事という世紀の大事業に着手して、そこに事業用の水力発電所を設置して、一八九一年（明治二四年）には京都の蹴上^{けあげ}に稼働させる大業を成し遂げた。

この日本最初の水力発電所は、電力供給事業として日本で最初の水力電気であると同時に、世界で最初の営業用水力発電事業^でであった。この電気の供給によって、四年後の一八九五年には京都にわが国最初の路面電車が走り、西陣織の伝統産業が再生し、紡績産業にとって新たな発展の原動力となった。

静岡県牧之原台地は、「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」と歌われた一帯で、現在では富士山を背負って見事に茶畑が広がる日本一の製茶地帯だが、ここは江戸時代には不毛の原野だった。その静岡に江戸を追われた徳川家の幕臣たちが入植し、明治二年に開墾をはじめたために、「旅行^{するがのくに}けば、駿河国に茶の香り」の名句で知られる大産業が興り、明治七年には横浜からの主要輸出品の輸出総額のうち四割近く^でをお茶が占めるまでになった。これこそ、現代

まで続く郷土に根ざした産業であり、これも幕臣の製茶事業が築いたのである。

渋沢栄一の政府改革は、このような状況を背景に、同胞の「幕臣」官僚の力を得て、「重量や長さの尺度を定める度量衡」から……租税……貨幣……建築……鉄道へと、次から次へと精力的に事業を進め、ついには渋沢が大蔵省全体を管掌するまでになった。そして激動の明治四年を迎えたのであった。

長州藩の井上馨・山縣有朋の強欲を取りこんだ三井財閥

明治四年二月一五日、大蔵省の貨幣鑄造工場が大阪府川崎に竣工し、開業式を迎えた。初代造幣頭へいのかみには長州の井上馨かおるが就任したが、この男は口達者で、強欲な男であつた。この貨幣鑄造工場で、おかしなことが起こつた。貨幣を鑄造するには金属が必要なので、古い金銀を買い集めなければならぬ。そこに目をつけたのが長州出の豪商・岡田平蔵であつた。彼は地金じがねを売りこもうと、横浜に輸出問屋の益田孝なる男を訪ねた。薩摩の五代友厚こだいともあつらと組んで造幣寮（造幣局）に売りこもうという計画で、益田孝が金属分析所を引き受けた。実は、薩摩出身の五代友厚がこの鍊金術の中心人物で、ヨーロッパで覚えた冶金術やきんを使つて独占的に金銀の分析をおこない、五代は巨万の富を手にした。

ここに登場した益田孝は、のちに三井物産の初代社長となつて、三野村利左衛門、中上川彦次

郎を継いで三代目の三井家「大番頭」として時代を動かす人物である。だが、もとは金山で栄えた新潟県佐渡生まれで、英語を体得して、鳥羽・伏見の戦いで幕府側の騎兵隊の隊長格をつとめて敗北した男であつた。この幕臣が、武士を廃業して横浜で輸出問屋を開業していた時に、岡田平蔵に目をつけられたのである。

こうして益田孝は一種あやしげな集団に入り、金銀を造幣寮に売りこんだところで、大蔵省を取り仕切る井上馨と知り合つたとされる。岡田平蔵は井上馨と同じ長州藩の一族で、井上馨の政商集団の一員であつた。

明治四年十一月一二日に外務卿・岩倉具視ともみを特命全権大使とする使節団が欧米旅行に出発し、大蔵卿・大久保利通が同行した留守中に、国家の財布を預かつた大蔵大輔たいふ・井上馨の強欲が表に出た。その時、井上馨が企んだのは個人的な悪事であつた。秋田県北部の尾去沢銅山おさりざわに目をつけ、債権者から詐欺すれすれの手口で強奪して、その銅山を身内の岡田平蔵に格安で売つたのである。翌明治五年には益田孝が井上馨に誘われて大蔵省に入省し、貨幣切り替えに伴う金貨鑄造に取り組み、造幣権頭ぞうへいごんのかみつまり造幣局長となつてしまつたのである。当の政府中枢が財務をまかつく分つていないので、彼らの目を盗んでいくだけでも搾取、背任、横領ができる時代であつた。

ところが明治五年四月二五日に佐賀藩の江藤新平が司法卿に就任すると、かねてから政府内で政商と組んであやしげな行動に明け暮れる長州藩の山縣有朋やまがたありともと井上馨の犯罪行為を次々と摘発しはじめた。こうして明治六年五月には井上馨も江藤新平の鋭い追及を逃れるため大蔵大輔を辞任

し、益田孝と渋沢栄一も共に大蔵省を辞任することになった。ところが井上馨は大蔵大輔を辞任するや、尾去沢に赴いて岡田平蔵と銅山を共同経営しはじめたのだから、これに怒った江藤新平が井上馨の犯罪をさらに追及しようとしたが、逆に孤立したのは江藤であり、潔癖な男は政府を見限って司法省を去らなければならなかった。

井上馨のような長州藩の貧乏侍が、西郷隆盛から「三井の番頭」と呼ばれたのである。「最大の財閥となった三井本家といえども、井上馨の許可なしには何も決められなかった」と言われたのは、なぜであろう。それは、江戸が東京と改称されて起こった出来事に原因があった。

そもそも江戸・東京では、武家屋敷が六割を占めるほど広大な面積を占めていたが、新政府は明治元年から二年にかけて、東京にある大名二八一家の上屋敷・中屋敷・下屋敷をまず召し上げ、徳川家の六〇〇〇家にもおおよぶ旗本屋敷もみな没収した。そして幕府を裏切って朝臣となった者にだけ屋敷を返還しながら、あさましくも宏壮な邸宅と土地のぶんどり合戦を展開し、政府幹部が大名屋敷に住みこんで、召使を抱える殿様暮らしをはじめたのである。

化けの皮がはがれ、東京の町民からすっかり評判を落とした新政府は、召し上げた江戸の広大な武家屋敷を、明治二年に輸出産業となるお蚕かいこ様の桑や茶を植える者に安値で払い下げたり、貸し付けようとしたが、この無計画・無謀な政策で、江戸にあった一〇〇〇を超える名園・庭園が桑畑や茶畑になって廃墟同然となった。やることなすこと失敗し、武家地はほとんど利用されないまま荒れ放題となった。商業から見れば莫大な資産価値のある東京の土地だったが、彼らに

はその価値と利用法さえも分っていなかった。明治四年には土地利用の三分の一も進まないところで桑茶政策は中止された。そのあと武家屋敷は皇族や華族、政府高官といった、政府好みの人間の居住地として使われることになった。加賀藩邸が東大の用地となるなど、研究所……学校の……病院などの用地にもなったが、麴町区こうじの桜田門外の井伊直弼邸の跡地には、陸軍省・参謀本部・陸軍大臣官邸が誕生した。そのすぐ近くに海軍省……麴町区総督部……荏原郡大森射的場……荏原郡海軍火薬製造所……芝区海軍火薬庫……板橋火薬製造所などと、明治時代後半からは、広大な面積が日清戦争・日露戦争のための軍用地と化していった。

こうした中で、三井組は、明治政府の発足直後から、戊辰戦争で軍資金の調達に功があつたため、朝廷から東京の土地を下賜かしされていた。三井組は現在の日本橋兜町、海運橋のほとりに地所を得て、そこに明治四年七月に三井ハウスを建設した。ここになぜか、三野村利左衛門に取り入ったあさましい男、井上馨がたむろしていたのである。三野村も政府の中で声の大きな井上馨を利用したのだ。そして井上馨が番頭でもないのに「三井の番頭」と呼ばれるようになったのである。

井上馨・渋沢栄一・益田孝が大蔵省を辞任した翌月の明治六年六月一日、渋沢自ら起草して公布された国立銀行条例によつて、三井組と小野組が設立した銀行を母体にして、日本最初の銀行制度に基づく「第一国立銀行」が設立された。これは、国立銀行と言いながら、民間銀行であつた。そして本店がその三井ハウスに置かれて、大蔵省を辞したばかりの渋沢栄一が総監役に就

任して、事実上の頭取の実務をとった。

ところがこの第一国立銀行は、設立の翌年に奇つ怪な大事件に見舞われた。明治七年一〇月二二日に明治政府が大蔵省の規則を改正し、それまで三井、小野、島田の三組に対して国庫の金を無利子無期限で運用を許していた方針をいきなり一変して、担保の供託を求めたのである。

これまで三井、小野、島田の三組とも、公金を流用して担保もとらずに多額の信用貸をしながら、ぼろもうけしていた。そのため三井組と並ぶ第一国立銀行の大株主だった小野組は、担保を出せず、一ヶ月後の十一月二〇日に破産して閉店となった。一二月一九日には、やはり幕末の勤皇派の金庫として働いた老舗のなかの老舗、島田組も同じく破産・閉店の道をたどった。一体、何があつたのか。三井は、番頭の三野村利左衛門が井上馨を抱きこんでいたため、大蔵省検査局による抜き打ちの検査を事前に察知し、急いで担保を揃えて、間一髪でこの危機を免れていた。小野組危うしの情報をいち早くつかんだ渋沢栄一もまた、第一国立銀行の危機を乗り切った。

結局は、ただひとり生き残った渋沢栄一が翌明治八年に第一国立銀行の初代頭取に就任して、経営権を完全に掌握し、第一銀行（現・みずほ銀行）に改称されたのちも、大正五年まで四二年間、頭取をつとめた。こうして、陰謀のおいが漂うなかで、小野組と島田組が煙のように消え去り、明治九年から官金扱いに復帰した三井が、政府金融を独占することになったのである。この時すでに、三井ほど巨大な政商は存在しなかった。

そのあとの渋沢栄一が、石川島造船所……富岡製糸場……麒麟麦酒（キリンビール）……札幌

麦酒（サッポロビール）……大日本製糖……大阪紡績……東京ガス……東京海上火災保険……王子製紙……秩父セメント……帝国ホテルなど、実に五〇〇を超える企業の設立と経営に参与したのは、彼が明治時代の影の政府代表であり、渋沢の名前があれば資金が集まったからである。誰もが渋沢を利用したわけである。ほとんどの大企業史に、発起人や顧問役として渋沢の名が出てくるのは、そのためである。

一方、明治七年には、野に下った井上馨が、益田孝と輸出入会社「先収会社」を設立した。この社名は、いかにも先にもうけをぶんどりそうな響きであつた。この商社がやはり長州藩の奇兵隊だつた藤田伝三郎を迎えて、東京本店のほか、横浜・大阪・神戸に支店を置いて、陸軍省に取り入つて手広く商いをはじめた。明治九年七月一日に三井銀行が開業すると、同日、日本橋に先収会社を母体として三井物産が開業し、初代社主に三井高尚と三井高明、社長に益田孝、監査役に三野村利左衛門が就任した。なぜ三井物産が設立されたかといえ、長州藩の工部卿・伊藤博文が明治六年に、九州の福岡県大牟田市おおむた熊本県荒尾市一帯の三池炭鉱を、江戸時代の経営者から奪つて政府のものとし、工部省の持ち物としていたからである。伊藤博文は蒸気船と蒸気機関車の燃料に必要な石炭を外国に売つて収入を増やそうと計画し、囚人を使役して坑内の業務にあたらせ、井上馨の仲間である益田孝に石炭販売を委任して、商社を設立させたわけである。もうけるとなれば、この長州藩と三井集団には、けじめがなかつた。

こうしてかねての約束通り、益田孝が三井物産を創立して石炭を独占して取り扱うようになった

た。一八八九年（明治三二年）には、国有財産の三池炭鉱をそっくり三井組に払い下げさせて、満州事変の翌年、一九三二年（昭和七年）まで四〇年以上、三池炭鉱が莫大な収益をもたらす三井物産のドル箱となった。かくて福岡が、日本有数の工業地帯に発展していった。

第二代伊藤公爵を継いだ博邦が伊藤博文の実子ではなく、もと井上馨の甥・井上勇吉が養嗣子となった人物だったから、三井物産誕生のそもそもから、事業は近親者の井上家と伊藤家の手の内で転がされてきたのである。

廃藩置県の陰謀で大阪の大手両替商が破綻させられた

話を再び明治初期に戻す。こうして三井に動かされる日本政府は、明治三年に「藩が外国商から借金をすることを禁ずる」との太政官布告を出した。そのため諸藩は、外国と取り引きする商人から融資を受けてきたので、事実上の貿易停止を余儀なくされたのである。言い換えれば、藩による貿易が政府によって妨害され、明治政府と結託した三井の政商が全貿易の牛耳を執ってしまった。

こうしたなかで、藩と政府の不換紙幣（貨幣と交換できない紙幣）が大量に流布して、紙幣が当てにならなくなると、商人は信用できる金銀の貨幣を買い集めた。そうになると、各地の領民は、藩が発行した藩札をますます信用しなくなつて藩庁に押しかけ、外国と取り引きする商人も藩に

日本近現代史入門 黒い人脈と金脈
広瀬隆・著

発 行：集英社インターナショナル（発売 集英社）
定 価：2,500 円（本体）＋税
発売日：2016 年 11 月 25 日
I S B N ：978-4-7976-7336-4 C0021

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)